横浜市小学校社会科研究会

５学年部会

研修会記録

第　６　号

令和６年　１１月　６日

横浜市小学校教育研究会
会長　　沼田　留美子
横浜市小学校社会科研究会
会長　　髙畠　聡
同　学年部長　　田澤　哲哉

【提案日時】
１１月　６日（水）

【会　場】
横浜市立　　平沼小学校

【西富岡小　会場】
提案　　金井　伸一　先生（西富岡小）
司会　　大橋亜矢子　先生（　元街小）
記録　　田中　沙季　先生（都田西小）

【駒岡小　会場】
提案　　能登　清仁　先生（　駒岡小）
司会　　藤原　佳澄　先生（新鶴見小）
記録　　平間　洸舗　先生（　桜台小）

【提案　金井　伸一　先生（西富岡小）】

１　単元名

「公害とむきあって　～四日市の人々からのメッセージ～」

２　提案者より

・他の公害と比べると裁判で完結している。そこから子どもたちは「なぜ納得したのだろう」という思考になり、問いを出すことはできるのではないか。
・工業の単元では、「企業も利益が必要で、よいことばかりやっていくのは厳しい」という意見が子どもたちから出てきた。今回の単元でも企業目線がでてくるのではないか。
・Yさんとzoomをつないで学習をする予定。
・被害者側で考えてきたからこそ、企業が現状をつかみ取れたということになれたらいいな
・国土理解のところになるため、公害に絞るよりも環境問題につなげていきたい。空気であればPM2.5や高速道路など。

３　協議会

・単元の２時間目はどのようになるのか
　→工業製品が伸びたのは１９６０年代というのは工業の単元で押さえている。太平洋ベルトはまだのため、そのまま太平洋ベルトをおさえながら入っていきたい。また、公害の年表も提示し、１９６０年代のところで公害が集まっていることに気づいてもらえたら。そして、四日市だけでない、と俯瞰した考えをもってもらいたい。

・「控訴」をどうおさえるか。内容としては６年生。

→今の段階ではNHKforSchoolの映像資料を使っている。子どもたちは理解ができている。

・資料②は二審で終わったのか
→イタイイタイ病は高裁で負けて、認めた。新潟水俣病は今年４月に認めた。ここから尚更四日市が潔く見え、問いが出やすい。

・「納得」という言葉でよいのか。「納得した」と「受け入れた」では違うのではないか。
→国に環境庁や環境をよくするという運動が広がり、これ以上やっても利益がないだろうという社長の判断で控訴しないとなった。子どもの言葉でいうと「納得」になるのでは。
→世の中の流れが少しずつこうなっていったという事実はどこで触れるのか。
→情報過多になるので、入れない予定。単元の中で、当時の世の中の様子が徐々に変わっていったことを捉えるのは難しいかもしれない。
→経済優先の世の中。裁判が始まったころから流れが変わってきた。そこが難しい気がしている。資料を出して、考えてね、も予想にしかならないのでは。
→７時間目に企業がやっていることや対策も勉強しているから、それを掲示していれば考えられるのでは。
→７時間目が大切になりそう。
→折衷案として「納得」という言葉を出していくのもよいのではないか。

【提案　能登　清仁　先生（駒岡小）】
１　単元名
「森林とともに生きる　～「きまつり」から考える木づかい運動～」

２　提案者より
〇変更点
・単元を見通す学習問題
「どのように　守っている」に変更
→本時のやりたいことと繋がる、子どもの実態に合わせて変更
・出前授業を行う予定
→森林管理や伐採のことについて知識を得た上で、Sさんに確認したいことや質問したいことを聞く。工夫しているところや間伐のこと、抱える課題などの質問は出てほしい。
→6時間目の終了後に出前授業を行いたい。授業が始まって反応を見てから内容を決めたい。できるだけ少しの時間でも子供たちに体験をしてほしい。あと子どもたちの聞きたいことを答える時間も十分に取りたい。Sさんも協力してくださる予定。実際に作業している服装で出前授業に来てもらうので、子どもたちにも気付きがあると思う。
・学習問題も言葉を変えた

〇目指す子供の姿

実際にきまつりに参加し、授業者自身もよい体験をした。きまつりを運営している人は、木のことを伝えたいという思いが強い。

→今回の授業を通して、見えないところの努力や想いを見えるようにしたい。

きまつりの出し物や体験

例：・丸太体験（2人で切る）→実際に切る作業は大変だった。

・椅子やテーブルなどの家具を作る体験（大工さんが手伝いをしてくれる）
※今回は小田原城の松を使用していた

・箸作り

（職人さんは小田原の小学校で出前授業もしている。木のよさや豆知識などを伝えている。→伝えたい思いが強い。）

・市役所の人も木のことを知ってもらおうと協力して動いている。

・コーヒーショップは実際に山で働いている人が運営しているところもある。

・食べ物→地域や自然のものを味わえる体験ができた。

→体験の作業をしているとき、子どもたちは近くで真剣に見ていた。

〇抽出児

A児：社会が大好き、自分で資料を集めることもできる。
物事を関連づけができる→見えない部分のことが少し弱い。

B児：資料を読み取るのもむずかしく、社会もあまり得意では無い。
今回の授業を通して、自分の考えをもてるように＋見えないところにも目を向けてほしい。→手立てを用意していきたい。

３　協議会

〇本気の学習問題

出前授業を通した上で、どのように学習問題に向かえればよいか迷っている。

→実態調査アンケートを取ったら、子どもたち的には木を使わない方がよいと思っている子が多い。

→きまつりでは率先して木を使っていこうとしているので、ギャップが生まれると思う。

→「森林を守ること」と「きまつりを運営していくこと」のつながりが純粋に疑問になると思う。

〇ここまでの質問

・ウッドチェンジマーク（林野庁のHPに載っている）

→暮らしの中に木を取り入れていきましょうという運動とそのマークで、調べていく中で子どもたちが見つけると思う。

・前時までには取り組みについては写真や資料で提示する予定

・林業の課題
（授業者が考える課題）
→日本全体で林業に携わる人口が減っている。
（子どもたちから自然と出てくると思う）
→小田原の場合は、市全体で取り組んでいるから良い方に向かっている感じはある。特に小田原は積極的に木材を使っている（木使い運動）。でも実際は日本の林業は市や県の働きがないと成り立っていない。
→組合と小田原の山主の問題（子どもたち的には難しい？）

・7時間目の扱いが重要になる？
→ウッドチェンジ・木使い運動・きまつりが並列している。
→8時間目にきまつりにフォーカスする？

・60～70年経った木がたくさん余っている現状がある。
→ウッドチェンジ・木使い運動をしないと国土の保全にならない。子どもたちにとって難しい（木を使う必要があるのはわかる）。→木を「きる」という意味がたくさんある（主伐、間伐）。ちなみにきまつりは間伐。

・Sさんは地元の木を使おうと思っている
→Sさんはきまつりに対して、川上という立場で自分達が頑張っていても、川中・川下の立場の人も普及するために頑張らないと意味が無いと思っている。
→イベントを通して横のつながりを作りたい。横のつながりを知ることで、行っている取り組みや思いが分かった。みんなで取り組み、県の木を使うよさを伝えたい。
→子どもたちは川上・川中・川下の理解が難しい。小田原はこの考え方が普及してきたから、林業的には成功している。

・もともと別々にイベント開催していたが、林野庁が声をかけてきまつりになった。

・全体的に難しいところだが、見えないところを考えるチャンスでもある。

＜世話人校長先生より＞

加藤　智敏先生　【金井　伸一　先生（西富岡小）】

・単元がとてもしっかりしている。安心して本音でぶつかりあうところや単元の接続性が大事。
・本時の授業をしたとき、「企業が悪いから～」というのは簡単に出せる。そこで「でもさ」というのを出したい。
・子どもたちが「コンビナート」「高度経済成長」「白物家電」は何か理解しているのか、どう人に役立っているのかがどこまで分かっているかがポイントになる。
・年表は中学校の資料集も使える。
・関連企業に入ることがエリート街道という時代。でも加担していたという葛藤を考えさせたい。校歌を変えることになったところを考えることもできる。
・工業の単元で出てきた「深さ」がでてくるように。
・みんなが根拠をもって話し合い、「そうだよね」で終わらないように。国・県・市という言葉が出てくると、また違う視点で話し合える。
・関わった人達の自分の考えが変わったりとか進化したりとか、自分がやっていることに納得できないことを理解しているという時代背景はものすごく大切。
・年表掲示はとても大切。この単元は６年生の単元のつながりでもある。本当に難しい単元。
・本時の中で立ち止まりがあるところがあってもよいのかもしれない。「納得したのか」「周りの人たちはどのようなことを考えていたのか」とかにするとやりとりが出てくる問題ができるのではないか。でも時代背景がとても難しい。裁判の年表になるのか時代背景になるのかどちらかに重きを置いていくのがよいと思う。

若色　昌孝先生　【能登　清仁　先生（駒岡小）】

1．授業の作り方について
・前時にどんな活動をするかを考える。
→林業が抱える課題や林業の取り組みがすでに手遅れである意識を持たせるかどうか。前時までに課題を確認できるとよい。
・本時について
→授業的には問題なく流れる。しかし、ひっかかりや疑問が子どもたちから出てこないので、どきどき感は無い。何かひっかかりが出てくる資料があるとよい。
・国土を守る
→森林・災害・公害の大きなまとまりの中で、特にどこを重視するのか。

2．教材・資料について
→国産の木材（小田原は杉・檜）をどのように使っていくのか

3．評価について
→森林について何を捉えさせたいのかをはっきりできるとよい。一人ひとりが森林の木材を使うことが大切に気づいたらA評価になり、脱木材化を図りプラスチックを使っていこうはC評価なのかどうか。このように評価規準が曖昧になってしまう。

文責　田中　沙季　先生（都田西小）、平間　洸舗　先生（桜台小）